

新中期経営計画 スモールミーティング —事業革新—

副社長執行役員

SE⁺センター、開発センター、ものづくり革新推進センター 分掌役員

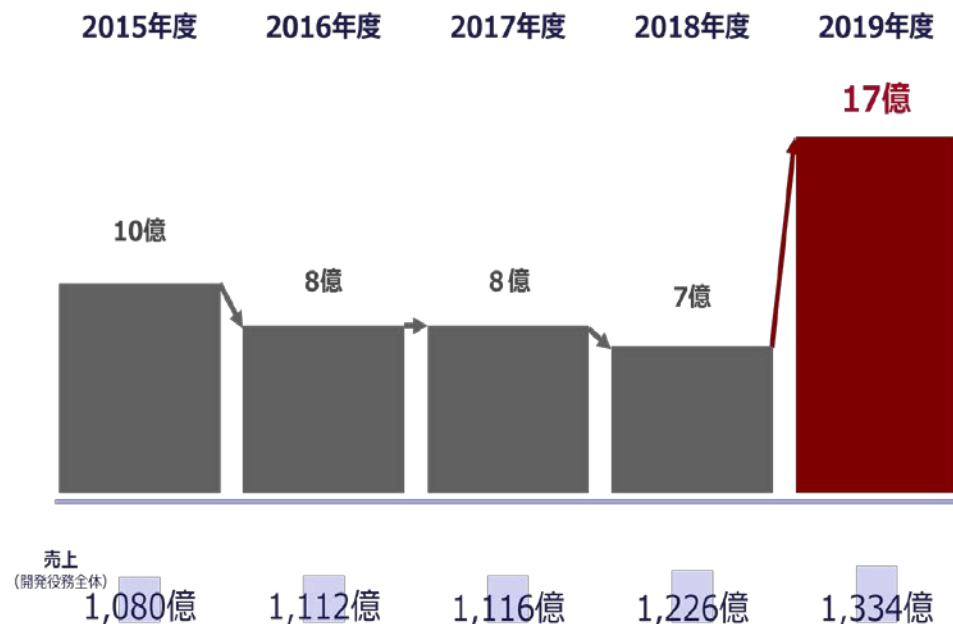
ものづくり革新推進責任者

遠藤 正利

2020年 10月 1日

SCSK株式会社

◆ 不採算案件



SCSKは

「不採算案件の撲滅」
だけではなく、

「逸失利益の削減」に取り
組んでいます！

※逸失利益 = 計画粗利 - 実績粗利

頻出する用語：

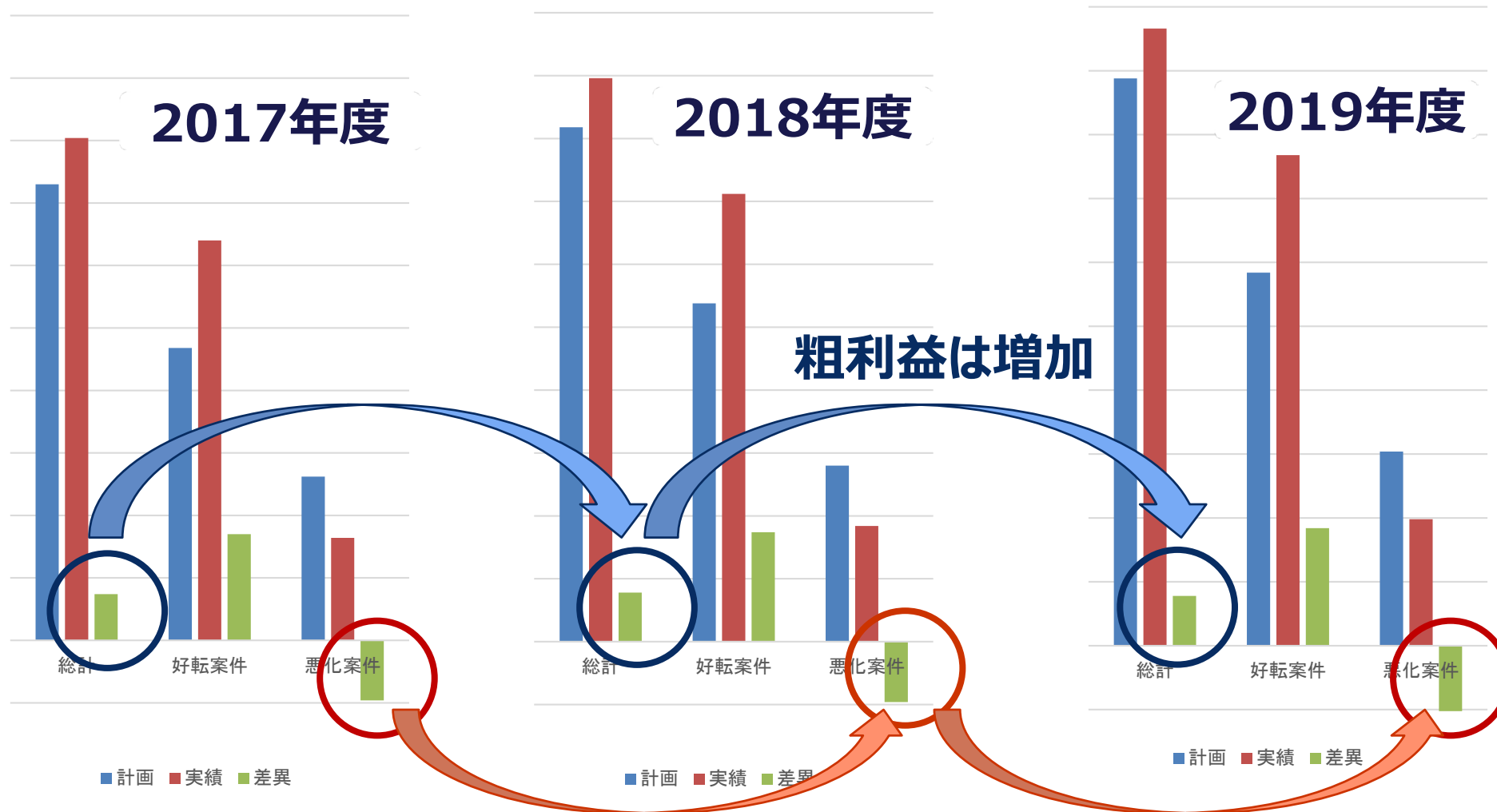


：当社が開発プロジェクトを推進する為の管理・開発方法のバイブル（＝標準）
（管理プロセスと開発プロセスで構成され、第三者による順守チェック機能で機能させている。）



：品質を維持しつつ生産効率を上げ、システム提供のアジリティ向上を図る為の仕組み
（開発～運用を通して標準化できる部分をプラットフォームや部品として提供し、それを使いこなす人材を増強する。）

◆逸失利益は出るが、好転案件の増加により、全体の粗利益は増加



※逸失利益 = 計画粗利 - 実績粗利（管理対象 開発・役務）

逸失利益は出るが、、

クオリティ向上への取り組み

『SCSKのシゴト革命(2017出版)』(はじめに)から、、、
(業界及びSCSKの正しい課題認識から始めた)

、、、作りたいシステムのイメージが曖昧な顧客が少なくない。ひどい時はシステム開発会社に要件定義の作業を丸投げして、要求だけを次々と突き付けてくる。

こうした顧客に対して受け身体質の現場の技術者は、言われた要求をすべて取り込もうと無理をする。その結果、当初の見積もり以上に要件が膨らんだり、要件定義に漏れや矛盾が生じ、後工程でのトラブルを招く。

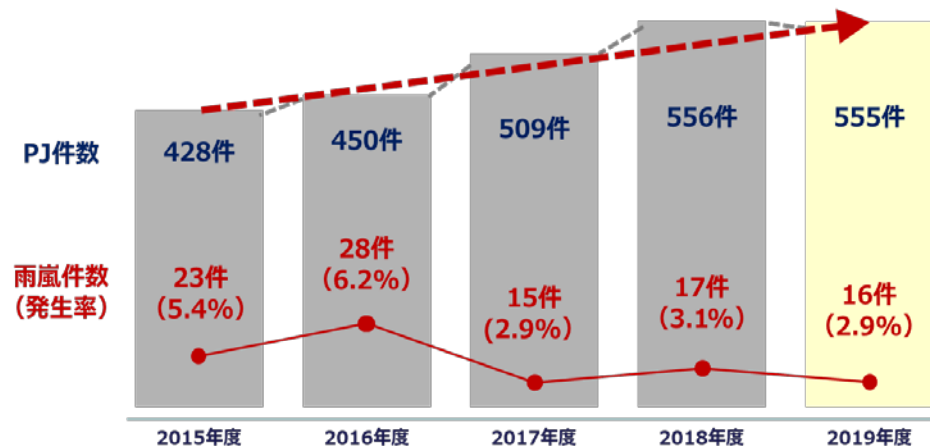
トラブルを解決するために技術者は深夜残業や休日出勤を、、(略)、、筋の悪い案件でもシステム開発会社の営業は目先の売上欲しさに受注してくるものだから、開発現場はますます疲弊してしまう(略)

IT業界がブラックと言われるゆえんは他にもある。向上しない見積もり精度、顧客とのあいまいな業務分担、属人的な品質管理、正式な書面のやり取りが無いまま見切り発車の業務発注、多段階の下請け構造に基づくモラルの低下、などである。これらは収束に手間取る問題案件を生む温床となり、、、(略)

SCSKは逸失利益に注目し、これら構造的課題を網羅的に解決すべく取り組んできました。その中心となるものが開発標準としてのSE+であり、開発運用の共通基盤としてのSC+である。すべての施策の結果がクオリティの向上に繋がり、収益性の向上に繋がると信じて。そして、新たな環境変化(新技術、新常态、、、)にも果敢に挑戦し続けていく。

繰り返される『問題案件の振り返り』の重要性：
個別事案に一喜一憂することなく継続した取り組みこそが基礎力を強くする

◆ PJ件数と雨嵐案件数の推移



● PJ件数は増加傾向：30%増

● 雨嵐案件率は減少維持

2015～16年度：5～6%

2017～19年度：3%

⇒ **案件成功率：97%**

- 最近のPJは、より大型化、複雑化しており、旧来にも増して顧客リスク、提案時リスク、上流工程リスクなどへの注意喚起がひつようであり
- そして高い生産性要求、品質要求に応えていかなければならない



3つの施策に注力し、分室を顧客との共創拠点へ

サービス
マネージャ

= 分室革新の実践リーダー

① 顧客接点強化

- 顧客のビジネス課題解決
- ソーシング戦略の推進

③ 分室の“ものづくり革新”



- SCSK標準ルール・基盤活用
(開発・保守・運用)

顧客

SCSK

- 業務・アプリ・インフラのサービス一体提供

② 仕事のやり方革新

BP

ニアショア

- パートナー関係高度化（専門特化）
- リソースの量と質の確保
- 分散環境による業務継続の安定性
- 安心・安全なリモートエンハンス

「分室」の定義・・・「顧客先常駐拠点」

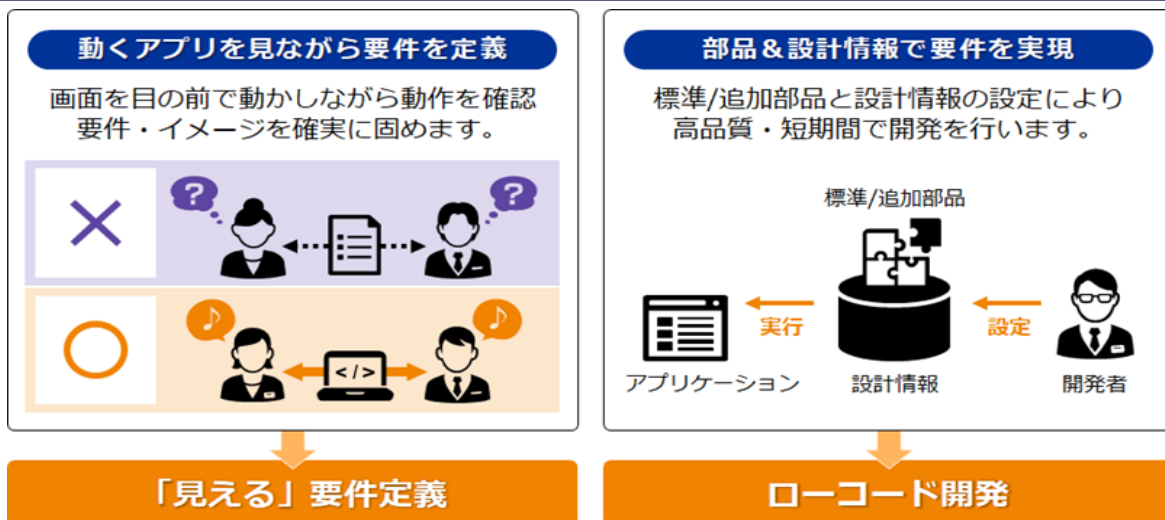
- ①**単一顧客**に対して ②**長期的に継続** する意思をもって、
③**役務（開発・保守・運用）提供を中心とする チーム**

		2020年度 (2020.7時点)	2022年度 (目標)
①	分室数	540分室	―――
②	エンジニア数 (内、社員)	9,300名 (2,850名)	―――
③	事業規模（売上高）	1,250億円	―――
④	NS（ニアショア）化 工数	650工数	1000工数超
⑤	SM(サービスマネージャ) 育成 目標	―――	200名 (内、上級SM100名)
⑥	社員高度化目標	―――	800名

ものづくり革新の概要

① システム基盤構築、システム運用の自動化

② 作らない開発の促進



③ 開発と運用の連携を標準化

④ SCSKグループ&コアパートナー各社が同じシステム基盤を活用

②既存の守りのIT（SoR）領域の収益性向上

① 既存事業領域の品質・生産性向上

運用標準化

標準化

自動化

知財活用

テンプレート

部品

ローコード・
ノーコード開発

FastAPP

S-FIA

atWill

CELF

プラットフォーム
の共通化

【S-Cred+PF】

コンテナ

マイクロ
サービス

DevOps

自動テスト

共通PF活用
エンジニア増大

社員
ニアショア
オフショア
パートナー

アジャイル
開発

④ DX含め攻めのIT（SoE）領域へ事業拡大

③顧客のビジネス環境変化へのシステム領域のアジリティ向上